

燕石襍志

与肆

① 吳東方言

⑦ 花咲翁

② 團頭

⑧ 兔大手柄

③ 藪八

⑨ 猴生膽

④ 猴蟹合戰

⑩ 浦嶋子

⑤ 桃太郎

⑥ 舌切雀

15
1599
4



その鳴音をりよの餅をめんりりりぬ餅餅を小畧でり酒をささり
 船を辞さる言をふとささり赤小豆をめんりりり色の赤りささり
 わせ物をめんりりりぬ数くささる居るめんりりり又の菜とめんりりり菜
 蔬のめんりりり魚類もささり菜とめんりりり好ぐは美をめんりりりり
 飯はけんりりり食へるこの餘茶をささり物をめんりりりめんりりり
 せんね乳をめんりりりめんりりり口ツツめんりりり限るめんりりり
 今の婦女をめんりりり雅言なりとめんりりりて二十百十のめんりりりめんりりり
 めんりりりり美をめんりりり餅をめんりりりめんりりり豆をめんりりりめんりりり
 下る餘米をめんりりり味をめんりりり菽をめんりりり豆腐をめんりりりめんりりり
 獨をめんりりり物とめんりりりめんりりり草ゆめんりりり草紙とめんりりり論とめんりりりめんりりり
 べんりりり戒せぬ亦めんりりりめんりりり乳をめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 ばらりりりめんりりりめんりりり優めんりりり

○昔よりりりり誘ひ今も送るものめんりりり誘草とめんりりりめんりりり漢の書とめんりりり
 その如くめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり穿鑿附會めんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 今をめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり

今為情あり女子を罵りめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 めんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 云云とあり又書齋めんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 物語巻の十二はめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 めんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 紫引と所謂ハ寶山空手回者とめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりりめんりりり
 頼めんりりりめんりりり随筆載られたり亦五雜俎は謝肇淪云余在英都
 度燈市以遊戲故見一右書右畫竟不可得真

又寝竊の界歟鼠の全負の爲息の世俗の頭髮の黒くする小

賊を天窗の裏に籠とるひるるなり

○白波緑林の故事より盗賊をせしむると雲のよき年といふ

あるなりとれをま名は白浪と書とれたるの家は稱りどま名は白波と

書なり又盗賊を今俗いづらばうといふといふところと通ぶ暴の暴度

暴悪の暴あるべしあつた世俗の只牛角が五え集は汪坊や花の落る

物まればといふるをいづらば汪坊と書りのあれど汪坊の原未假字なるを

あつた暴由坊もその假名もいづらうと云はつた亦世俗小賊を昼鳥と

つる唐の夜鶯といふ怪鳥ありそのの二對とて五雜俎と名支果將

熟專有紫盗緑枝接樹橋捷如風園丁防之若巨寇

然瞬息不覺千万樹皆被漁獵名如夜鶯云又棍徒を

スリといふ郷談雜字は郷剪扭音拘摸といふといふ契沖竹社は并盡集

ある後人のなりもいづらひるはれをいづらふにね心のよきならといふ教をいづ

籠字を當たりて亦学語篇より須利と書り林語といはれど出処詳

ならずと被がとるをいづらひはれとていづらふ物といふといふるはれはなかりといふ

いづらひ又念秧杜騙を胡麻の蠅と名つらるるその賊もや不ヤンといふ

れを胡麻の上より蠅は蠅もなり亦少女を豪棄しとれを累賣といふの

を世俗といふといふと響い勾引の二字を當たりて乃唐のよりの招契の賊と和

訓といふといふその門を迷はる化け誘引のさるる人の人といふを

いづらふといひ狐狸の人を魅するをいづらふといふといふといふ馬鹿といふ馬鹿の

秦の趙高が鹿を指し馬といふといふ破事といふといふ世俗といふといふ

あるといふといふ益の辨はれど筆の走るをいづらふ

○九月より十二月まで夜長は比諸職人夜をいづらふ作り経営をいづらふ

といふ婦女子の燈り縫刺ともいふ夜といふといふ一説といふといふ夜渦の京

○俗夜も活業を勉めたりる主人たる月の茶粥を煮ててはせしむれば夜
○朝とりの寒夜茶餅を小鍋で煮たりて知るとして或はついでに説非
○とて暮のゆきを夜に煮ててはせしむれば夜にゆきのゆきを煮
○又夜並の煮とてゆきを煮ててはせしむれば夜にゆきのゆきを煮
○ゆきを煮ててはせしむれば夜にゆきのゆきを煮
○月次を月並とてゆきを煮

○回答の和訓をいふまじりて物にひらひらとたりてゆきを煮
○通つてあつてもをりてゆきを煮
○ともをいひてもをりてゆきを煮
○非なりてゆきを煮
○人いふゆきを煮
○有言ゆきを煮

○今俗人は對してあつてもをりてゆきを煮
○通つてあつてもをりてゆきを煮
○ともをいひてもをりてゆきを煮
○非なりてゆきを煮
○人いふゆきを煮
○有言ゆきを煮

○今俗人は對してあつてもをりてゆきを煮
○通つてあつてもをりてゆきを煮
○ともをいひてもをりてゆきを煮
○非なりてゆきを煮
○人いふゆきを煮
○有言ゆきを煮
○言を簡畧よせんゆきを煮
○言まりめれど俗骨の削ぐて俗の俗に随てゆきを煮

われど殊よその義違ふのゆゑにけりやばも健とて古人もこれを論じたり
うらむとて新年の賜とのみ義まきくそれを受くる人らとてしるふと稱せむ
贈る人より標よ事あると爲さず不敬の至るを受くるもの由又その不敬をあら
事あると書らば玉の賜の假字ありやかき音は清くねんごうと湯をこころ
とてうらみ畢竟くらんの茶わもくらん病買ふとのみ落は似たりとある物
とて又わらむの砥とていん枕詞ありやわらむのうとつげたるをその義とて
ありとていとうとて近属俳諧狂言の歳旦よむの春と詠るやうに年を
ねんごうと鏡と同月の鏡あり物本を作るもの亦られやあるべしその或る
一言半句たりともう婦幻はひんごうと純まるとりけく俗に近を旨
とてあらばびらうらうのそまうりさればとて今の作は物語と推文り
夢よこころの紫女といふもよむべしあつらん放りてとさればそのこと述ぶの趣を盡
とて衣冠より懸鶉より動靜云為より喜怒哀楽より瞭然とて竹箸の
中より着官或は紗衣或は怒り或は怪し或は悲し或は滯りて涙の冊子を温
とてを習ふとてうらよ随う倦とてあらはるの文和漢を流し雅俗をまへ人情を
けし流勢をのし百幻百出奇中よ奇を出せらるべしゆればや唐山の稗
官者流演義小説の書を編よ俗語をうらとてさるる彼水滸傳まじり
ものも雅文をうらそれを綴らば施羅も旁とて切あらん且唐山の作文ハ雅俗の
二つを我 東方のされは倍々雅俗に新故和漢の四ありそれを撰と
易らるるものゆゑに稗説瑣言ハ鄙事とていふべしゆゑのなうねど名流の
間ハ拵ぶりの解くさるれを枉るゆゑに他を識るハいと易くさるら
るゝの酷難く成らざる識者と古人もいひりゆづらうとの語を味みたり
因よの江戸の書肆物の本を新刊とて作者の稿本を種々と唱へ
とるゆゑに譬ハ足利時代の書を綴らんとてゆゑにそれ方年紀後方年紀と
とていふその拵とていふとていふ書籍を種本といふべしゆゑに昔の繪

われど殊よその義違ふのゆゑにけりやばも健とて古人もこれを論じたり
うらむとて新年の賜とのみ義まきくそれを受くる人らとてしるふと稱せむ
贈る人より標よ事あると爲さず不敬の至るを受くるもの由又その不敬をあら
事あると書らば玉の賜の假字ありやかき音は清くねんごうと湯をこころ
とてうらみ畢竟くらんの茶わもくらん病買ふとのみ落は似たりとある物
とて又わらむの砥とていん枕詞ありやわらむのうとつげたるをその義とて
ありとていとうとて近属俳諧狂言の歳旦よむの春と詠るやうに年を
ねんごうと鏡と同月の鏡あり物本を作るもの亦られやあるべしその或る
一言半句たりともう婦幻はひんごうと純まるとりけく俗に近を旨
とてあらばびらうらうのそまうりさればとて今の作は物語と推文り
夢よこころの紫女といふもよむべしあつらん放りてとさればそのこと述ぶの趣を盡
とて衣冠より懸鶉より動靜云為より喜怒哀楽より瞭然とて竹箸の
中より着官或は紗衣或は怒り或は怪し或は悲し或は滯りて涙の冊子を温
とてを習ふとてうらよ随う倦とてあらはるの文和漢を流し雅俗をまへ人情を
けし流勢をのし百幻百出奇中よ奇を出せらるべしゆればや唐山の稗
官者流演義小説の書を編よ俗語をうらとてさるる彼水滸傳まじり
ものも雅文をうらそれを綴らば施羅も旁とて切あらん且唐山の作文ハ雅俗の
二つを我 東方のされは倍々雅俗に新故和漢の四ありそれを撰と
易らるるものゆゑに稗説瑣言ハ鄙事とていふべしゆゑのなうねど名流の
間ハ拵ぶりの解くさるれを枉るゆゑに他を識るハいと易くさるら
るゝの酷難く成らざる識者と古人もいひりゆづらうとの語を味みたり
因よの江戸の書肆物の本を新刊とて作者の稿本を種々と唱へ
とるゆゑに譬ハ足利時代の書を綴らんとてゆゑにそれ方年紀後方年紀と
とていふその拵とていふとていふ書籍を種本といふべしゆゑに昔の繪

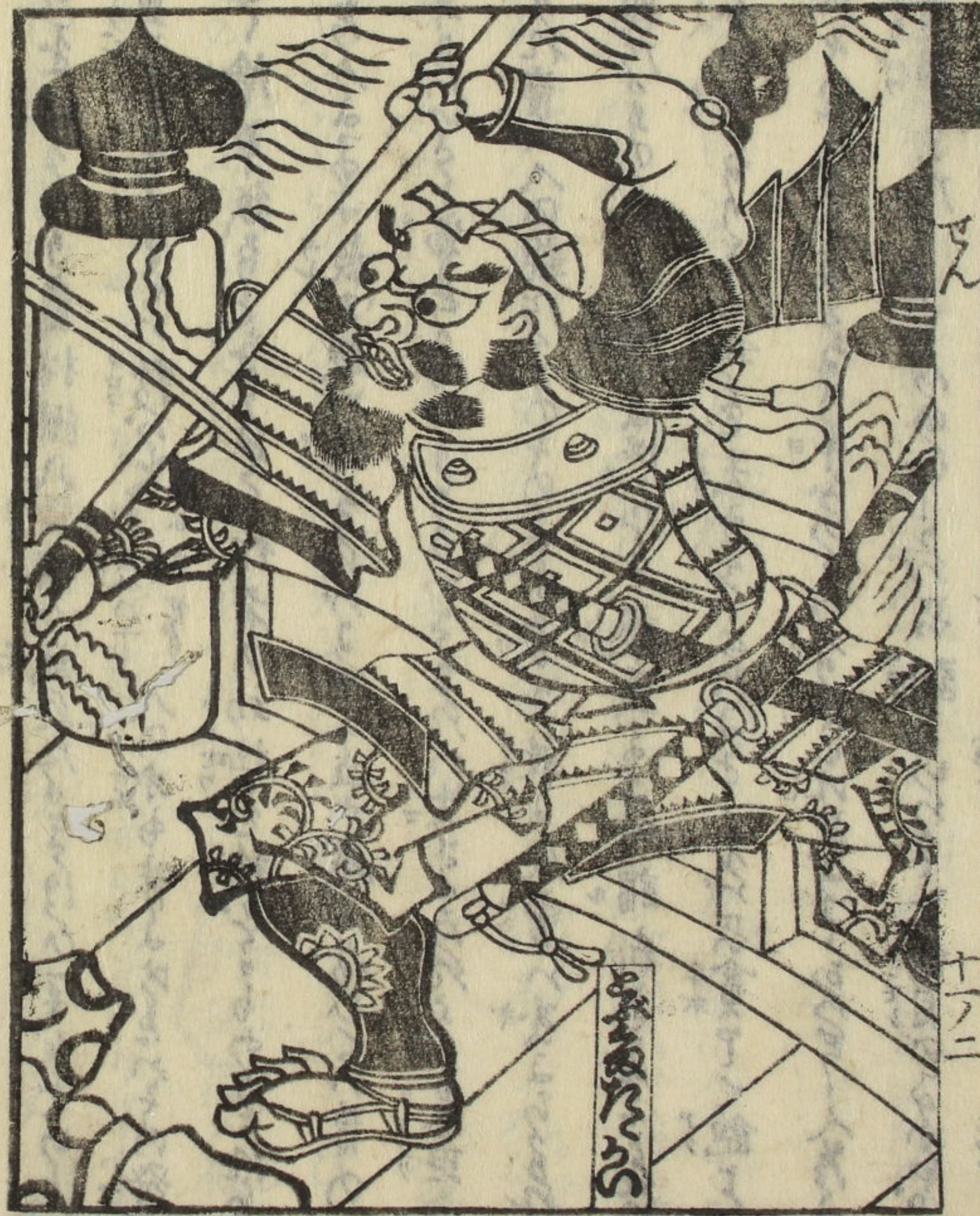
草紙の作者と云ふものありて近藤清春羽川琢重富川吟雪が徒画士の
作者と筆畊を擬たりしと云ふ書肆より借用する引書を種本と唱へ
りて今もあつたかあつて浪華の書肆ハヤ寫本と唱へたりし本と云ふ
優劣あり

○鹿嶋のうらうらみのうらまゝと拍とありの猛者なるなりじう人のうら
猛れを肯うたる時又此を曲曲あらん歌歌伎役者の朝夷義秀又拾
とれた田か三男小林の朝夷はりさうのうらまゝも猛者なり朝夷と云ふ猛さ
のうらまゝと自誇せられたるは縁年間の歌歌伎役者中村傳九郎からあつ
た朝夷のうらまゝと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
林と稱し鶴の紋のうらまゝと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
紋ありしと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
操狂言の金平と云ふ緋字をとらりしうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
のうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ

すはら頼實を好むなり貞材源八政信が画師たるうらまゝのうらまゝのうらまゝ
繪本を今の童子ホムムと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
と云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
は物教たるなりと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
愚直なり少年のうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
るこそ愛せられ昔人の親たるものうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
はりの今人の親たるものを教ふるは必利を教ふるは所謂利を教ふるは
危し賃類の家の思ひなりとも利を先きうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
をあらじと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
剛臆を試し賞罰をたらしと云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
えぬのうらまゝの物事憐ると云ふうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ
勇ハのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝのうらまゝ

金平十人見

全一冊凡一十六張 綉像四張あり 幕
とての第十二張より十三張に飾る



金平十人見



金平十人見

文禄四年 五月吉日

通の油町 井筒屋新板

○亦ヨが裁る不列一本ありえ録十四年の刊布なりの事の趣
キキヨク 相似り當初金平と題する繪草紙数板あり今罕く傳ふる意
キキヨク 夫が戲曲は秀像とく左夫直傳の正本と稱するめ
ヒレツ イタ コウス スキ
ワラ モトヨリ キ ホコ ナカニ アリサテ
レメ スロ フデ タビ ホウ
キウウウ ウチモ ヨリス マウイ サト ヒク
ドヘア レイホウ
フデ アト フクナ モラツ
ヒレツ イタ コウス スキ

いほりしり

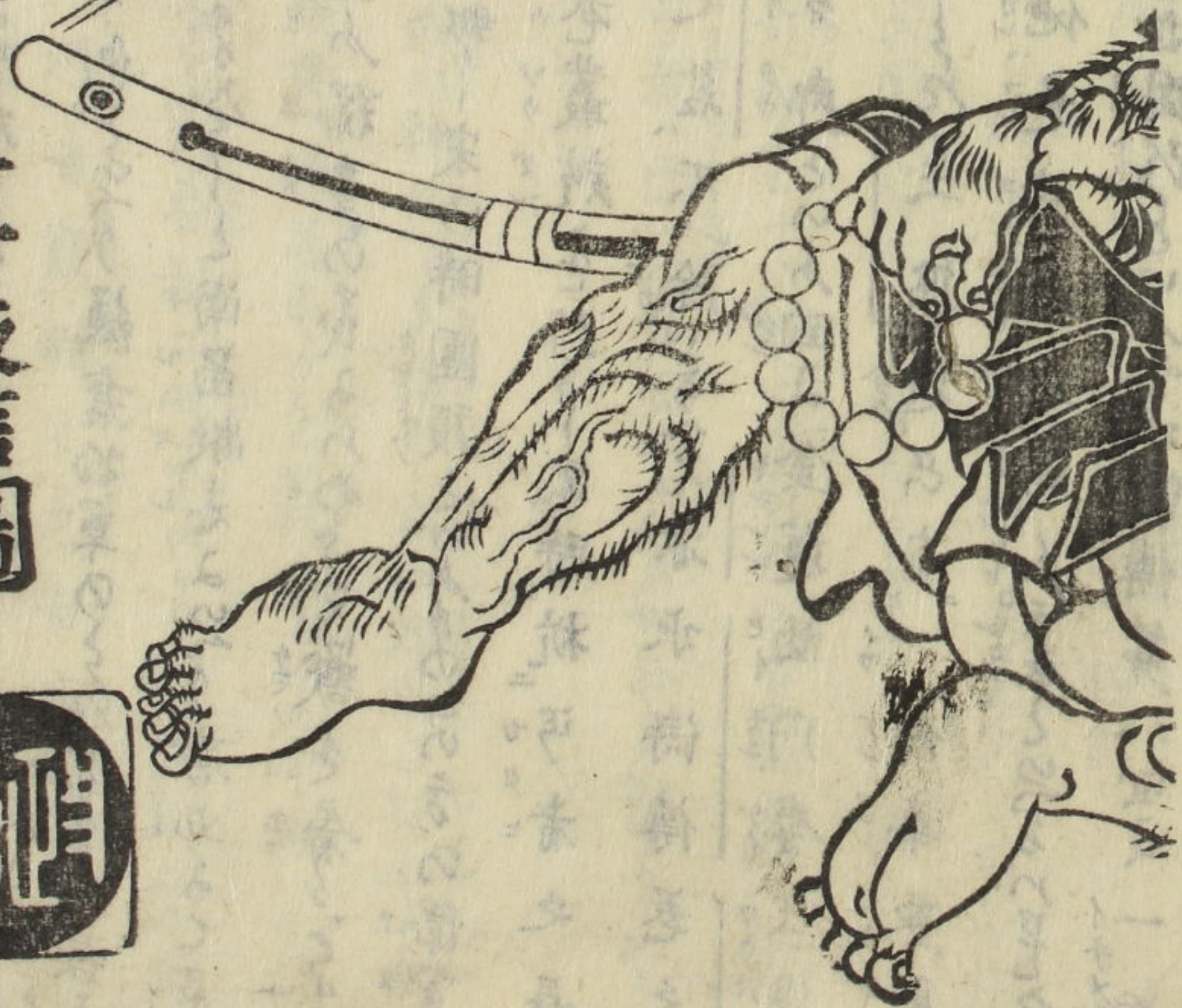
全一册折本あり奥村源八政信画
 綉梓の書肆は設発の年月詳るらん

頼光朝臣シヨノキニトキ
 世スに勝れたるを佛に比ぶる泉太夫が脚本を鼻祖といふがいの
シムコウ クワイシヤ コ、シ エセ イ キンヒラ ユ リ キ ナカ ヒラ ヨシ ヒテ ラ
タゴホウ カレ オ ア ソ
マサカト スミトモ サクラ ダイ ツ
マサカト スミトモ シラ ヒ シ ヒ
コツケイ カ ツ カ リ ウ コ ヤ
ヒ ツ



坂田金平入唐

東武大和畫工 貞村政信圖



貞村政信

二團頭

織妻の多とりの... 本邦の獸店の如く宋の時團頭とりの方の... 團頭雖富而巧者之名不除... 十五。漢婦藥煖武方郎とりの回入金蓮西門慶王婆... 相討く武太を奪んとりて王婆道。只有一件事要緊地... 方上團頭何九叔他是箇精細的人云云とりの... 事山の俗語は物の團頭を亦團頭とりの水滸傳第八回一面七

有半。團頭鐵葉護身枷とりの... あり東涯先生團改をヨゴロと刻ズと二郎の京師の... 倫訓蒙圖彙よええたりとの團の字は暗合のとりの... かり團改の意を象するの頗奇も至十人を火とて五火を團と一團ハ五... 十人之日知録よえ又團ハ聚之巧者一團の改るれ... 三 數入

毎年正月十六日市井の老小或ハ神仏へ系詣一或ハ郊外に拵山一奴婢の... この日主人は許されずのみが親里へ帰展するを數入とりの今俗にこれを宿... かりとりの正月十六日の... 人。多以正月十六日遊寺觀謂之遊百病とりの相似たり... 按じると遊百病とりの拵山一とりの先氣を難ひ百病を走らるの義ありたり... 本邦は數入とりの唱るる本据詳るる只云極以障帷福の發句よええたり

原野^{ハラノ}経^ノ道^{ミチ}遙^{トシ}を^ヲ敷^キ入^リり^ニこ^ノひ^{たり}ん^は奴^ヌ婢^ヒホ^ガ親^{オヤ}里^{サト}へ^ゆり^も未^ミ門^{カド}
より^ハ白^{ハク}屋^{ウチ}へ^いる^るれ^がら^れる^も敷^キ入^リり^ニこ^ノひ^{たり}ん^は奴^ヌ婢^ヒホ^ガ親^{オヤ}里^{サト}へ^ゆり^も未^ミ門^{カド}
踏^{フミ}青^{アヲ}の^ミま^もも^も稱^ナへ^り縣^ノより^ノ草^{クサ}ぬ^りた^田金^{カネ}へ^ゆく^を敷^キ入^リり^ニこ^ノひ^{たり}ん^は奴^ヌ婢^ヒホ^ガ親^{オヤ}里^{サト}へ^ゆり^も未^ミ門^{カド}
を^シ敷^キ入^リり^ニこ^ノひ^{たり}ん^は奴^ヌ婢^ヒホ^ガ親^{オヤ}里^{サト}へ^ゆり^も未^ミ門^{カド}
許^カを^ノ隔^ヘり^左大臣^{サダメノ}孫^{ムコ}原^{ハラ}時^{トキ}平^{ヘイ}公^{キミ}の^墓あり^{大臣}の^餘流^{ヨリウ}と^稱せ^りの^後
村^{ムラ}あり^りと^逃入^リ村^{ムラ}と^唱へ^一名^{ヒト}敷^キ入^リり^ニこ^ノひ^{たり}ん^は奴^ヌ婢^ヒホ^ガ親^{オヤ}里^{サト}へ^ゆり^も未^ミ門^{カド}
む^らと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
の^らら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
稱^セせ^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
を^らら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
ま^られ^がら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
宿^{ヤク}い^らり^の末^{マツ}ち^りん^と唱^ナへ^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
諸^{シヨ}の^連歌^カを^唱へ^りし^が社^{シャ}年^{ネン}よ^らむ^む志^シら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
あ^らみ^あ見^ミい^らり^と思^ハれ^るを^唱へ^りし^が社^{シャ}年^{ネン}よ^らむ^む志^シら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
煮^モゆ^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
を^輯録^{キョク}し^てその^遺志^シを^果し^て後^ノ更^ニ佛^{ブツ}諸^{シヨ}連^{レン}歌^カの^説を^記し^て
今^ノの^筆記^キを^らり^と思^ハれ^るを^唱へ^りし^が社^{シャ}年^{ネン}よ^らむ^む志^シら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
よ^らむ^志ら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
何^レの^批評^{ヒヤウ}志^シあり^と思^ハれ^るを^唱へ^りし^が社^{シャ}年^{ネン}よ^らむ^む志^シら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
ま^られ^がら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
枕^{マクラ}し^ての^夜の^物も^せら^れり^と思^ハれ^るを^唱へ^りし^が社^{シャ}年^{ネン}よ^らむ^む志^シら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
昔^{ムカシ}より^童蒙^{モウ}家^カの^と思^ハれ^る物^{モノ}諸^{シヨ}も^あら^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}
窓^{マダ}友^{トモ}の^暗彈^{アンダン}を^換め^りと^思は^れど^{これ}の^元弘^ノ建^{ケン}武^ブより^兵乱^{ラン}う^つた^る朝^{チウ}権^{ケン}を^失ひ^{たる}貴^キ人^{ヒト}

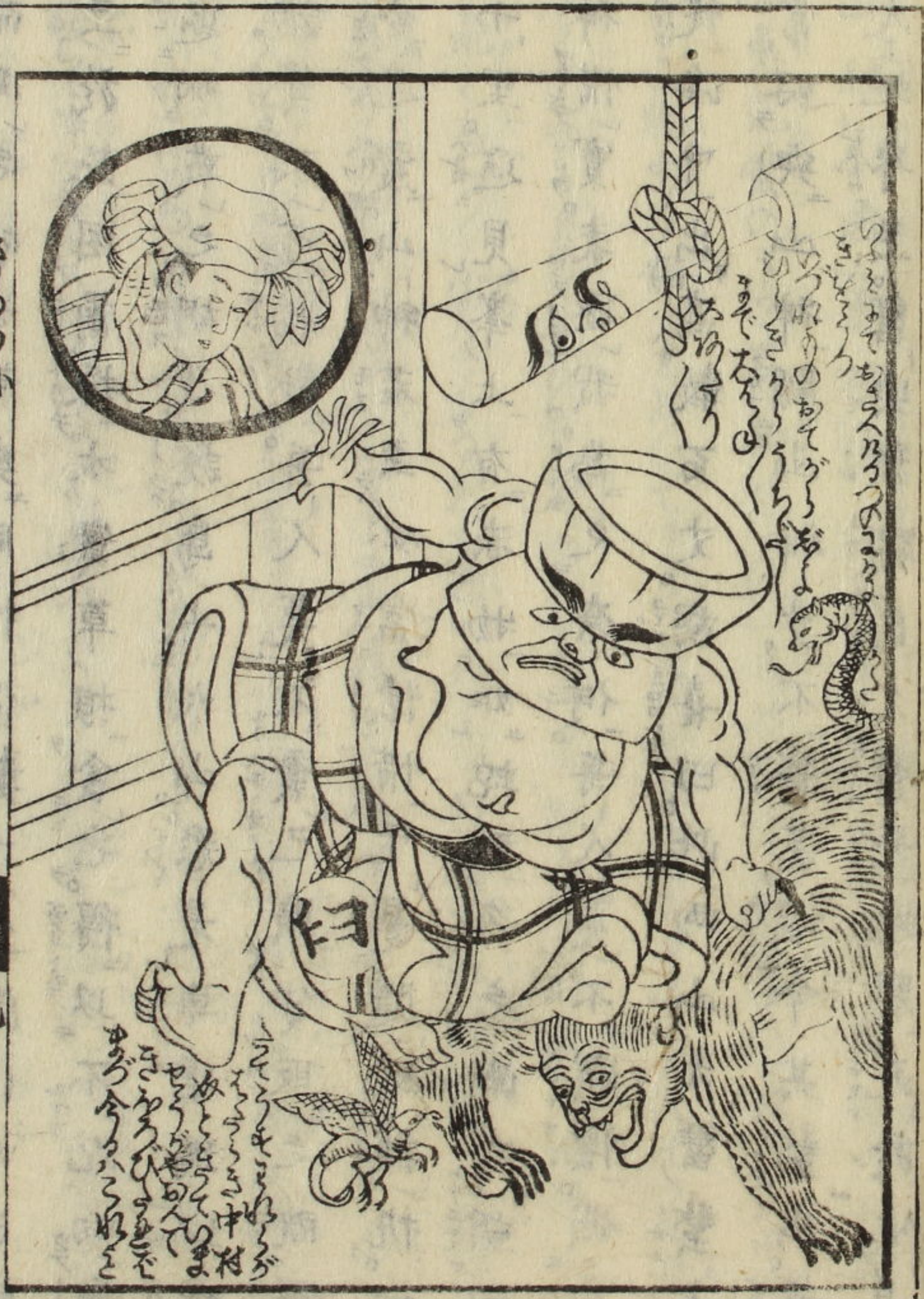
四 猴蟹合戦

昔より童蒙家のとある物諸もあつた根くぬありと云ふ事と云ふは
窓友の暗彈を換めりといふは牙鬚並附會の説をあらわす

再板
さるかに合戦

下

全本一冊所
下巻也第八頁
涉第九頁



る餘空曆明和の向再刺とるとろの繪草紙桃を扉を切雀兎大手柄花
浦島太郎ホの教本あり原是江戸大傳町書肆鱗形屋の藏版を以て信芳町
書肆西村永壽堂より藏めり今ある年々又見行とる奇とするは是れバ
り也

さるかに

九

斯一常云乘一船泛海往天竺國者已六七度其最後船
漂入大海不知幾千里至一海島島中見胡人衣草
葉懼而問之胡云昔與同行侶數十人漂沒唯已隨
流得至於此因爾採木實草根食之得以不死向數
哀焉遂船載之胡乃說島上大山悉是車渠瑪瑙玻
璃等諸貨不可勝數舟人莫不棄已賤貨取之既滿
乃四十里遙見峯上有赤物如蛇形久之漸大胡曰
此山神惜寶未逐我為奈何舟人莫不戰懼俄見
兩山從海中出高數百丈胡喜曰此兩山大蟹螯也
其蟹常好與山神鬪山神不勝甚懼今其螯出無
異矣大蛇身至蟹與盤鬪良久蟹夾蛇頭死於水上
地連山船人因是得濟又蟹與蚯蚓戰久多其頭陀物語
云友齋涼免流螢のりる行脚は一日た山一暮宿るらんと
すう後方は物あり怪いとてひてえんと北をみると三尺ほど長さ
の杖のちりとえゆる身の赤い色をの如くある風をたすうさゆま
動くとも飛ともあく宙まはるれて近づぬる程涼鬼魂消し肌膚
のろ襟寒するうまをひんととてと声護どる足まをころけく一歩つ
あふととちんととてと忽ち後方より水まのうき鳴り本草瓶と戦ぐ
物の響ひしくとすゆあをうとてとるその物をとてかひたすこ
う汗を絞る辛うとて人のあまを入るやればまの涼鬼が面を常あふぬ
を研るその故を問う涼鬼あまの变化はあまをを告主人たれをす
まのららう笑をその世よひまの物よふとて山の蚯蚓と蚯蚓山の土を
食はて年を移す土気を起しそを飛行を必りかの如く兩霄一たらし

いづくともあつて出づれば澤蟹と戦ひてそのを打つて其腦を吸ひてその
西國又まづりての蚯蚓の如くなるもの澤蟹の如く故に其の如く蟹の
大サ三四尺その最巨なるに至るまで其の長餘もそのあり甲の上の
草木を生じ眼の光天を射撃を抗足を運して人を食ひて其の
り蚯蚓の如く彼を打はがて却人を清く似たりと云ふは其の如く
蚯蚓の如くその虚実の如く知れど蟹の如く殊に巨大なるものありと
玄一中記天一下之大物有北海之蟹焉舉一蟹能加於
山の上。身在水中。又山海經云姑射國大蟹在海中蓋
千里之蟹也。又女史而大蟹廣千里と注され大蟹の他
物と闘の證ありありと虎の本邦なるれ蟹を獲て代りて其
と云ふは因縁あり蟹録云肩公書蕉云西方山中亦有人焉
其長尺餘。袒身捕蝦蟹性不畏人。見人止宿喜依火

以炙蝦蟹伺人不在而盜人蟹以食蟹名曰山獺其
音自叫人常以竹箬火中煨煨而山獺皆驚犯之令
へ寒熱と云ふ山獺山都の屬欽山都の獺に似る最大なり性蟹を
食ひて食ふりのりありと云ふは蟹と怨を結び且鶏卵爐中に在りて
火を撃て爆煨し蟹を驚かし漁者の竹をりて火中は著煨煨し
る山獺を撃るとのりあり相似たり亦蟹録に述異記を引きて宋の
嘉の初富陽の人王子窮濱中に蟹窟を作ると山都の窟を襲て蟹を
盗るるを載その説前の山獺に似る頗精細を述異記に參考する
よれ刺の本よりあり亦疑なり山都或山精と作る孫之驩云異苑云
山精如人。一足長三四尺。食山蟹。夜出晝藏。と云ふは
山獺山都の老猿獺の屬なり蟹の蟹を襲て其の根を食ひ
○猴蟹合戦と題するもの蟹録云俗有蝦荒蟹亂之語蓋

取^レ其^レ被^レ堅^ク執^シ鏡^一歲^或暴^至則^御人^用以^爲兵^糧也^{とい}
乃^又因^此欲^シ蟹^ガ拾^ヒ以^爲食^之乃^又欲^シ蟹^ガ食^之乃^又欲^シ蟹^ガ食^之乃^又欲^シ蟹^ガ食^之
集^ニ朱^登爲^東海^相遺^敝蟹^蟹留^報書^曰遽^伯王^受孔^氏
之^賜必^以及^御人^敬謹^分貶^於三^老尊^行者^曷敢^獨
享^之見^于晴^川カ^と以^分越^以似^り○蟹^ガ猴^又傷^らる^る乃^又欲^シ蟹^ガ食^之乃^又欲^シ蟹^ガ食^之
ら^れを^憐れ^類を^盡し^て猴^を責^らる^る乃^又欲^シ蟹^ガ食^之乃^又欲^シ蟹^ガ食^之
松^江沈^宗正^每深^設筭^於塘^取蟹^入饌^一日^見ニ^三
蟹^相附^而起^近視^之一^蟹八^跪皆^脫不^能行^二蟹^卑
以^テ過^新宗^正爲^感嘆^遂折^筭終^身不^復食^蟹董^孔昭^昭
曰^西利^生之^論友^也曰^第二^我夫^耳月^不能^及手^足
不^能相^代在^我者^且然^刻伊^人乎^義哉^斯蟹^郭索^字
縛^蕭之^間謀^其身^不遺^其友^との^似り^且蟹^入乃^又欲^シ蟹^ガ食^之

義^ハ仗^ヲ蟹^を報^ひし^の和^漢と^れり^之亨^釋書^云蟹^滿寺^者在^山
山^一列^久世^郡有^郡民^合家^慈善^奉佛^有女^七歲^誦法^華
華^華門^岳數^月而^終全^部一^日出^遊村^人捕^蟹持^去
女^一問^捕此^何爲^答曰^免食^女曰^以蟹^惠我^我家^有魚^與
相^報酬^村人^與之^女得^放竹^中歸^家敗^乾臭^其又^耕
田^一中^一蛇^追蝦^蟆而^含之^又憐^而不^意曰^汝捨^蝦蟆^以
以^汝爲^婿蛇^聞言^舉頭^見蒜^吐蝦^蟆而^去父^歸舍^思
念^語發^言恐^失愛^子慎^愷不^食婦^及女^問曰^蒜何^有
憂^色而^不食^父告^實女^曰莫^慮也^早食^焉又^悅受^膳
初^一夜^有叩^門人^女曰^是蛇^也只^言二^日後^未父^問門^有
有^衣冠^人曰^依約^未及^隨女^語曰^且待^三日^冠人^去
女^語又^擇良^材固^造小^室室^成女^入內^閉居^三日^後

冠一人果来。見ニ女屏居。生ニ念恨心。乃復本。秋長數丈。以
 身纏室。舉尾敲戸。父母大恐。不得争奈。半夜後。叩声
 息。聞悲鳴声。頃刻悲声又止。明且又見。大螃蟹百十。
 手一足乱離。蛇又被瘡。而餘所。并皆死。女用室出。顔色
 不變。曰。我聞戸外大小蟹千百。死此。蛇大蟹。交歸小
 蟹。死今存者。皆小蟹耳。然大於尋常。我通夜誦普門
 品。有一菩薩。長尺餘。語我曰。無怖也。我擁護汝。又母
 大悅。便穿土埋。衆蟹及蛇。就其地。置寺薦冥福。故号
 蟹滿寺。又曰。紙幡寺。唐山の狄訓練といふ所の懐西湖
 判官能稱。を言ひて。狄が五子相継ぎ病死。て西湖の医生の母。蟹を
 食ふとを嗜み死。て蟹心を入。て苦惱を受。て平江の細民張生。蟹
 を煮。て出。て蟹を活業。て殺。て其の蟹數千。百紹興五年七月。に至。て

その家忽怪あり。張が女。終る死。張夫婦も又死。てその家。絶。て。る。事。
 漢の王吉が夢。て巨蟹を。て。司馬相如が文章。を。て。天。り。て。横行。せん
 り。を。て。る。事。宋の鄒浩が蔡京。を。隔。ら。て。昭。別。を。猶。ま。つ。て。乱。石。の。り。て
 蟹一枚。を。て。る。事。を。江。に。放。す。の。應。報。も。て。次。の。日。赦。さ。れ。て。京。に。歸。
 り。て。宋の元嘉。年。向。章。安。縣。の。人。嘗。虎。を。屠。る。海。に。至。大。き。い。鱈。を。え
 て。食。ふ。と。を。嗜。む。夜。夢。に。姫。も。り。て。汝。我。肉。を。啗。ふ。我。汝。が。か
 を。食。ひ。ん。と。告。ぐ。と。て。その人。明日。虎。に。傷。ら。れ。て。死。す。り。亦。順。治。八。年。の
 季。冬。百。獅。池。の。蟹。柱。死。の。の。屍。を。示。す。淫。婦。女。奴。夫。を。頭。下。り。て。皇。縣
 の。進。士。蟹。を。釣。り。解。え。の。兆。と。さ。る。事。唐の龍朔。初。洛。陽。景。福。寺。の。比丘
 尼。の。侍。童。伍。五。娘。死。す。り。その生。る。事。を。寺。中。に。あり。て。蟹。を。食。ふ。と。て。刀。林
 地。獄。に。墮。たり。と。す。その事。又。憑。り。て。冥。福。を。求。り。て。四。時。の。中。の。民。徐。生。が。婦
 蟹。を。嗜。む。と。す。その夫。每。秋。に。海。濱。に。至。り。て。螃蟹。を。拾。ひ。繩。を。り。て。

これを買ひ推しぬるは婦蟹を煮て飽やせしを嚼みその繩戸外
に積り置きたり一日婦早に起り窓を推積り繩の処をえれば扱百
の鬼ついでに大に終るに叶う遂に病を受時と蟬蟹が身を繞りて
を夾と叫び狂ひ死を志する所を人その処を蟬蟹除と叫ぶと
是小説に述るとし載り類書にありては只蟹の多き答怨を報じ
故事成峯亦我関西の俗説と毒永の殺す平族まゝ長門の赤間及屋嶋
檀浦に没とすの冤塊化して怪し蟹とありたり今もあつて背殺人面と似
たり眼に分明うき勇士の怒るが如し名はけり平家蟹とあり扱別大物
浦も又蟹あり海に入れば武文蟹とあり又扱別安里河も入れあり夫
名はけり嶋村蟹とあり相傳へ正慶二年一宮の隨身秦武文松浦枝
二謀られ御息所を棄去らる武文とこれを逐ふ大物浦に自殺し冤鬼風
濤を發して主を救ひ遂に化して蟹とあり或いは享祿四年細川高國

二好海雲と戦ふ敗れしと其の臣嶋村貴則若戦し主を救ひ遂に女
里河に没し化して蟹とありとありその實ハ一種の唐少とこれを関公蟹と
し蟹録所謂吳沈氏子食蟹得背殺若鬼狀者眉月口
鼻布明白常寶戲之とありの是なり平家武文嶋村が子石川寓言
は傳るといふも亦是蟹に蟹言あるの説由未久く五雜俎載唐天寶間
當塗民劉成李暉以巨船載魚有大魚一呼阿弥陀佛
賊萬魚俱呼其声動天晴川亦云堅執續集云唐天
宝間宣城劉成舟中聞蟹呼佛云云如怪蟹ありてまゝり
○蜂を刺り蜂を刺る封侯の對あり又冷鹿山の強盜八十餘人京より未
くる水浪商人をひいてんとて夥の蜂を刺りて又法成寺の池のほとり
ある蜂阿弥堂の簷よける蜘蛛を刺りてその友の仇を報ひて今昔
物語卷の二十四張より十七張までえたりとありの事とありて歌○持

と曰が蟹を輔けりといふ所の孫村曰が名を象りたる欽史記趙世家の
趙嗣が門客公孫杵臼その友程嬰とも謀りて趙氏の孤武子を輔終
は仇人屠岸賈を滅せしとあり○右人戯るる蟹を取る傳畧を述
る所の宋の陳造が長史傳清の孫之驥が日蟹傳ホありゆれば我俗
の菰柄とよめる蟹蟹合戦の事と同し結るなり

用み蟹杯曰其斗大者。匡一漢人或用以酌酒。謂之
蟹杯。亦河陵雲螺之流也。見于晴川蟹錄。後蟹錄
亦云。顧一古初說畧云。蟹杯以金銀為之。飲不得其
法。則雙螯鉗其脣。必盡乃脫。其製甚巧。載石屏詩。
落木正秋晚。黃花九日催。竹當陪勝踐。其把蟹螯
杯。予曩嘗有之。乃雨。說又寬永中京師の盛妓吉所が蟹の杯を
國にたが再按するは彼杯の原來顧大初が蟹杯を摸りたるなり

且その傳畧も悽ありん吉所の寛永二十年八月廿五日没す法号喟
玄院妙達日性鷹峯壇上の墓あり壇上の山門の吉所が建立する
が後火に係りて改建しりと寺僧の語るより京よりける賀樂主
人といふその墓碑の年慮橋菴墨しとらぬをあらはれ年益の辨
るんと聊曩篇の訛舛を補ふの事

○伊豆の七嶋大嶋より八丈まであるやまが牛馬の外に餘獸あり但菰の
安しといふり按するはそれらの嶋鼠の蟹の化せるものなり昔書太
康四年會警。螭蟻及蟹皆化鼠甚衆。復大食。編為
安といふゆゑなりこれを蟹鼠といふものなるなり

○東坡蟹を嗜す後漸その殺生を厭ふる復終に食りて又明の李
笠翁これを嗜す東坡は過る後蟹録云。李笠翁平生嗜
蟹。以蟹為命。每干蟹。末出時。即備錢以待。自呼其

錢一曰買命錢

○蟹を食ふと柿と荊枝と同じ食ふと毒なるを本草汁を解と
本草子えたり亦蟹の毒の中られたる大黃の毒を解と
凡菘汁鼓汁蘆根汁黑豆汁生藕汁皆その毒を解と
晴川を餘杭の苦世衡とすはるる後蟹録とす

(五) 桃太郎

童姦又昔老夫婦ありけり至夫の薪を山に折婦の流に流衣を流ふ
は桃実一ツ流して来り推りて食ふ夫は食ふと其の桃の匂に
男ありたりとて老夫婦原未るるに桃の中より思ふを
を娘育との名を桃太郎と名かばるる
其の母は思ふに夫は食ふと其の桃の匂に
一日その母は赤松園にありありの野にありありの母を
鬼嶋に赴いて寶を盗んたると言ふ父は言ふと勇と
ふは金子既よとのへへ桃を食られを後聞ふ著父母は
途は犬ありその後聞ふ赤松園をへへとされ一ツあり
よととつ又猿と雉子とありとありと赤松園をへへと
其の岩を責め鬼王を擒りて鬼王もその敵に
物隠蓑隠差打出小槌を献呈す主の命をとり斬り桃太郎の寶を
奪りて鬼王を殺し犬猿雉子をけり放郷にゆき母を
を安樂に養ひてつとつと

桃實の中より思ふを生きて由り不見る竹節の中より思ふ生れた
るといは漢よその故事あり述異記云
西南夷傳曰云云
夜郎縣西南
夷國名也其先有女子一院一節竹一流入
聞其中有一號声一刺竹視之得一男歸而養之及長

罌罌子桐キツセニ龍鬚菜を食すとコトの故事コトなる歟

されば桃果の中ミに呪チゴの生ウケまると作スらるるの類セツは固ヨまると且カクその竹タケとタケをタケのタケ別ワに桃實モモとモモのモモのモモ桃モモのモモ仙セン術ジュのモモとモモ百鬼精物を殺コロすの

功コウあれレにレ加カえ流リるルに桃實モモをモモのモモのモモ窮鬼キウキをオヒ追オひコ呪コを生ウ福フクをキタ未ミだ

らラのラ右事記ミヤコト所イ謂イ伊イ耶ヤ那ナ岐ギ命ミコト告ツク桃モモ子コ汝ニ如ニ助タシ吾ワ於ニ葦原アシハラ

中ナカ國クニ所アラ有ル。宇都志ウツシ伎キ青人アヲヒト草クサ之ノ落テ苦ク瀨セ而ニ患レ摠ト時トキ可シ

取トルとト昔ノ昔ノよりヨリ亦モ晋陶淵明シンタウエンメイがトウクワ桃花源トウカゲン記キをヒひヒりカ又モ述シ異イ

記キは日本國ニ有ル金桃キントウ其實キ重シ一ヒト斤ニとト云フるルもモ稱ホへテ亦モ桃モモのモモ鬼キを

退治タイヂするルにレ本草綱目ニ卷ニ五ニ果門ニ桃モモ果ノ下ニ云フ摘ツクらレ注ツ鬼キ

症シヤ急キウ以テ桃モモ仁ニ五ニ十ニ枚ニ研ケン泥デイ水スイ煮シ取トル四ニ升ニ服ス之ヲ又モ傳ツ尸シ

鬼キ氣キ桃モモ仁ニ一ヒト兩ニ去リ皮ト尖ノ杵キネ碎カキ水スイ一ヒト升ニ煮シ汁シユ入レ米メ作ス

粥カユト空ス心シン食シ之ヲ又モ鬼キ症シヤ心シン痛ツク桃モモ仁ニ一ヒト合ケ爛ラン研ケン漿シヤウ湯トウ服ス之ヲ

亦モ云フ神シン桃モモ主シユ治チ殺ス百鬼精物ヒャクキシヤウモノ一ヒト絞シ殺シ精シヤウ魅メイ五ニ毒ニ不レ祥セウ療リョウ

中ナカ一ヒト惡アク腹痛フク又モ桃モモ花ハ下ニ云フ氣キ味ミ苦ク平ヘイ無レ毒ニ主シユ治チ殺ス症シヤ惡アク

鬼キ一ヒト令シム人ヒト好ヨク顔カネ色シキ悅エツ澤タク人ヒト面オモ留ル確カク類ルイ書ショ云フ神シン農ノウ經キヤウ云フ菓カ桃モモ在テ樹ジュ不レ落ラク殺ス百鬼

果ミをミ食シふル忽ト老ロウをロウ退タイ復フク強キヤウとト云フ又モ桃モモ葉エフ下ニ云フ氣キ味ミ苦ク平ヘイ無レ毒ニ主シユ治チ除ス邪ジャ

鬼キ中ナカ惡アク腹痛フク又モ天テン行コウ疫エキ癘レイ常ジョウ以テ東トウ行コウ桃モモ枝エ葉エフ漿シヤウ湯トウ浴ヨク

之ヲ佳ヨシとト云フ又モ日本紀ニ神代紀カミヨノキニ伊弉諾尊イサノノミコトノリ自ヨ黃泉ヨモツクニ走シ

還カヘ時トキ雷ライ等トウ皆ミナ起テ追オ来キ時トキ道ミチ邊ヘ有ル大オホ桃モモ樹ジュ故カレ伊弉諾尊イサノノミコトノリ

隱カクレ其キ樹ジュ下ニ因ヨリ採テ其キ實ミ以テ擲ナ雷ライ者モノ雷ライ等トウ皆ミナ退シ去ク矣ナ此レ用モツ

桃モモ避サカ鬼キ之ヲ緣ヰ也ナリ云フ又モ其ノ時トキ桃モモ之ヲ名ナをタマ賜タマふル意イ富フ迦カ牟ム都ツ夫フ美ミ

命イコトとトのノ古事記ニ上代本紀ニ第十卷ニ三ニ法ニ云フるルにレ又モ風俗通ニ東トウ海カイ

度ト朔シヤク或シ作ス山ヤマ有ル大オホ桃モモ樹ジュ盤ハシ屈クツ三ニ千ニ里ニ下ニ有ル鬱ウツ壘レイ神シン荼タ以テ

食シ之ヲ鬼キ名ナ曰フ蟠パン桃モモとト云フるルにレ其ノ故コト事コト云フるルにレ桃モモ右ミダリ郎ロウ鬼キ嶋シマ到イリ

千の敵軍駭騷^{オホキササキ}味を落^{オホ}されぬ^{見千巻}なり^{二十三}○又雉^{キジ}を後^{ズサ}者と
あ^{ムミヤリ}り^{シマタテ}なる^ニ名^ニ雉^ヲを擬^ギした^ク欽^ク焉^ニ事^ニ本^ニ紀^ニ云^ク高^{タカ}皇^{ミコ}産^ム靈^{ヒノミコト}尊^{ノミコト}勅^ニ
尚^{モウ}諸^{シヨ}神^{カミ}等^ヲ曰^ク昔^{シマタテ}遣^{マツ}天^ニ雅^ニ秀^ヲ於^{ケル}葦^{アシ}原^{ハラ}中^ノ國^ニ至^リ今^ニ所^ニ以^テ久^ク
不^レ末^カ者^ヲ蓋^シ是^レ國^ニ神^ヲ有^ニ強^ク禦^ル之^者我^レ亦^モ遣^{マツ}竹^{タケ}神^ヲ尚^{モウ}天^ニ雅^ニ
彦^{ヒコ}還^{マツ}留^ル之^所申^ス也^ヲ思^フ兼^ニ神^ヲ諸^{シヨ}神^{カミ}答^{コタ}曰^ク可^ク遣^{マツ}無^ク名^ニ雉^ヲ亦^モ
鳩^{トビ}一^ニ周^ニ遣^{マツ}無^ク名^ニ雉^ヲ與^ル鳩^{トビ}而^{シテ}往^ル就^ス之^也此^レ雉^{キジ}亦^モ鳩^{トビ}降^ル未^ダ見^レ粟^{アハ}
田^フ豆^{マメ}田^{タラ}則^{シテ}留^ル而^{シテ}不^レ返^ル所^ニ謂^フ雉^{キジ}頭^{ヒタダシヒ}使^{ハシ}亦^モ豆^{マメ}見^レ落^ル鳩^{トビ}是^レ
其^レ緣^ヲ矣^{ナリ}○雉^{キジ}の粟^{アハ}田^ヲをえ^ル留^ルる^所被^レ黍^{カノキビ}を^シめ^ルなり^ト
い^ハり^テ雉^{キジ}の瑞^{ズキ}鳥^ニ也^{ナリ}その瑞^{ズキ}桃^ヲを郎^ヲが寶^ヲを得^ル富^ト又^モ至^ルの前^ニ象^ヲと^シ易^ニ
離^リ為^レ雉^{キジ}傳^フ玄^ニ雉^{キジ}賦^ニ云^ク稟^ニ之^正氣^{キヨク}應^ズ朱^ニ火^ヲ禎^ニ祥^ニ云^ク
雉^{キジ}の南^{ミナミ}方^ニ火^ヲ象^ス○鬼^キ嶋^{シマ}の鬼^キ門^{カド}を表^スり^ラれ^ル送^ハる^所西^ニ方^ニ申^ス而^{シテ}戎^ニ
力^ヲと^シら^レん^所四^ニ時^ニ配^ハり^テ西^ニ方^ニ秋^ニと^シ金^ニ氣^ヲ殺^ス伐^ス主^ト也^{ナリ}
その意^ヲと^シ深^ク且^ニ鬼^キ嶋^{シマ}の南^{ミナミ}嶋^ニの摠^ヲ名^ヲと^シる^所本^ニ雉^{キジ}の鬼^キ嶋^{シマ}へ到^リ功^ヲめ^ル
う^ヲを^シり^テ潛^ニ確^ク類^ニ書^ク云^ク雉^{キジ}雄^ヲ者^ハ有^リ冠^ヲ長^ク尾^ヲ交^ハり^{采^ヲ善^ク鬪^ス○}
猿^サの^ノ人^ニ後^ニひ^リる^所和^ニ漢^ニの^ノ例^ニ倣^フぬ^所毛^ヲ拳^ニ又^モ違^フぬ^所○桃^ヲを^シ郎^ニ
鬼^ガ嶋^{シマ}へ到^リ寶^ヲ貨^ヲを^シり^テし^テる^所為^ス朝^ニの^ノを^シ擬^スり^テ保^ルえ^ル物^ヲ詠^フ
為^ス朝^ニ鬼^ガ嶋^{シマ}渡^リの^ノ辰^ニ又^モ御^ヲ曹^ニ司^スの^ノ西^ニ國^ニと^シる^所詔^ヲの^ノ社^ヲ調^ヲ練^スせ^ル所^ニ詔^ヲを^シ
も^シ損^スと^シ押^ス上^リ見^レ給^フハ^シ長^ク一^ニ丈^ニ餘^リある^所大^ニ童^ノの^ノ髮^ヲの^ノ空^ニ様^ニ取^リあ^ハり^テ身^ヲ
も^シの^ノ毛^ヲと^シ生^スる^所色^ヲ黒^ク半^ニの^ノ如^クる^所が^ノ口^ヲを^シ有^リ指^スる^所ま^ニく^シり^テ云^フ
亦^モ云^フ實^ニの^ノも^シる^所れ^バ鳥^ト穴^ヲ穿^ルる^所その^ノ鳥^ノの^ノ勢^ヲの^ノ鴨^ニ程^ニ為^ス朝^ニされ^ルを^シん^所あ^ハり^テ
伴^ヲの^ノ大^ニ滿^クま^リる^所本^ニ有^リを^シ射^テ落^ス空^ニを^シ翔^ルる^所を^シ射^テ殺^スる^所と^シる^所鬼^ガ嶋^{シマ}の^ノ
もの^ノご^も舌^ヲを^シ振^ルて^シら^レ忍^ル所^ニ汝^ヲも^シ我^レ又^モ後^ニに^シら^レぬ^所の^ノ如^ク射^テ殺^スと^シる^所
宣^フハ^シ皆^ニ平^ニ伏^ス後^ニに^シら^レり^テ身^ヲ又^モ著^クる^所物^ノの^ノ網^ヲの^ノ如^クる^所太^ニ布^ニと^シる^所布^ヲを^シ画^ス
の家^ヲと^シり^テま^ニく^シ持^ツ出^スる^所前^ニに^シら^レ積^ツ置^クる^所島^ノの^ノ名^ヲを^シ問^フぬ^所鬼^ガ嶋^{シマ}と^シる^所

雀の棲をなぐのみちるさからこのゆきさうう同定あすもれ由徳はらんさ
 ばさのぬ雀又葛籠ニツを削りてあつたゆかやうりあつたをさる
 せんたと同よりた葛籠へそれどは寶く教をへりあつたぬ雀とさ
 せんたのさあらんさうさうせんたのゆかよるさあひなるやうして得
 も徳げられどあらじとさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 うりこのさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 絶丸を葛籠ニ化せぬたれど雀はる物よりさうもあつたぬ雀と
 人をながめさ雀の棲はなぐ子ゆかよるさあひなるやうして得
 よさなるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 せんたのさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 のゆかよるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 せんたのさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 せんたのさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得

致鳥とみゆのゆかよるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 を徳とみゆのゆかよるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 の物よりさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 至一華陰山見一黃雀為鵲巢所擗墜地又為蟻蟻所
 困寶慈之取歸置巾箱中采黃花飼之百餘日羽毛
 成朝去暮還一日夕更寶讀書有黃衣童子向寶再
 拜曰我王母使者蒙君拯濟今當決南海不得復來
 以白環四枚與寶曰令君子孫潔白位登三公一湯如
 此環續壽諸寶生震震生兼兼生賜賜生慈四世三公
 果應白環之兆也切雀の根本又今の致鳥はよるさあひなるやうして得
 たりといふゆかよるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得
 周一公命返也といふゆかよるさあらんさあひつゆかよるさあひなるやうして得

夫の如く病ゆへに遂にむらさきに死す

この物語のりも物うらやみするものを誡るすべし

とて種々の草紙のうらやみは彼とていふも一橋の物語は

なる秋中ぐ犬のあや報ひしもの郡司が妻の蚕の糸を惟ま

物語 卷二 今云今ハ世に冬何國の郡司妻を物とせり

さして糸のほくさうけりてあつたよりの妻が蚕の糸を

うとみりてあつたよりの物をしれば物もあつて人もあ

者二人をかりあつておほくつたあつたあつたあつたあ

はあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

ひたつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

其所之至。桐、陂、岸、枸杞、葢、中、隱、而、不、見。但、餘、紅、線、在、
外。即、掘、柏、抱、叢、乃、得、根、叢。如、黃、犬、狀。持、歸、蒸、之。芬、香、
滿、室。仙、將、食、之。繇、此、仙、去。類、書。○犬、の、精、の、入、り、た、に、松、の、灰、を、
て、その、灰、の、函、を、示、せ、し、り、あり、述、異、記、云、皇、太、皇、時、朱、休、之、家、
犬、歎、曰、言、我、不、能、致、聽、我、歎、梅、花、今、年、故、復、可、明、年、
當、奈、何、遂、殺、其、犬、明、年、休、家、人、並、死、卷、下、見、手、第、十、九、條 ○柘、木、の、復、
春、あ、ら、う、の、楊、柳、親、音、の、ま、ま、う、て、つ、み、歎、又、法、華、經、藥、師、喻、品、我、
為、如、來、兩、足、之、尊、出、于、世、間、猶、如、大、雲、充、潤、一、切、種、
稿、裏、生、云、云、又、梁、高、僧、傳、釋、法、雲、姓、周、氏、陽、羨、人、云、云、
嘗、一、日、講、散、感、天、花、狀、如、飛、雪、滿、室、而、延、于、堂、內、云、云、
續、齊、誌、記、京、兆、人、因、真、兄、弟、三、人、共、分、財、所、居、堂、前、

有、紫、荊、一、株、華、甚、茂、共、議、破、而、為、三、待、明、截、之、忽、一、
夕、樹、即、枯、花、真、見、之、驚、謂、諸、弟、曰、樹、本、同、株、當、分、折、
便、悽、悴、况、人、兄、弟、孔、懷、而、可、離、是、人、不、如、樹、木、也、又、
身、相、感、而、更、合、樹、隨、復、活、亦、用、之、遺、事、明、皇、遭、祿、山、
之、亂、盡、興、西、幸、林、中、枯、一、松、復、生、枝、葉、葱、蘢、宛、若、新、植、
焉、后、肅、宗、平、內、難、重、興、唐、枯、一、松、再、生、祥、不、誣、矣、亦、王、
世、貞、列、仙、全、傳、延、祥、觀、枯、槐、一、株、丘、處、檄、以、杖、遶、而、
擊、之、此、槐、生、矣、及、今、榮、茂、云、云、ら、れ、ら、枯、ら、る、本、の、更、又、茂、王、或、ハ、天、
ら、を、花、の、ふ、も、う、ら、う、を、の、つ、と、夫、本、集、卷、之、後、二、位、行、家、卿、埋、木、の、あ、れ、ら、枝、
二十九 花、と、れ、一、昔、よ、う、く、ゆ、れ、ら、ら、る、是、ハ、奇、を、お、も、う、く、こ、こ、は、ま、う、と、
る、の、を、こ、こ、が、血、塗、ま、く、ゆ、を、を、妻、の、女、を、こ、こ、紅、の、衣、あ、り、ま、と、お、も、
ら、と、こ、れ、ぐ、お、い、と、ら、う、の、福、富、の、草、紙、と、い、み、繪、卷、物、の、り、し、た、と、似、

○狸の腹鼓へはきくうきりあふて夫木集廿九寂蓮法師へんきくんカネ音エトてぬふまよ狸のこころをほくうらけれ

追考 卷之十二 獸の腹に鬼をうと唱ふと十二支の限を歌ふう
とのと鏡とありては再按じると中葉を十二支の留をうけり
うの花うのうとありては體よりて詠たる物あれどうのうらうのうら
ると思ふうては不承致しあふゆとうのりらうはあふらん月の桂のうら
をたのむと定苑をよとあつて今俗の常言は小事をうのりりを突た
る程のうとあふも鬼の毛いと細糸のうればなり又楊柳の和名を
宇豆木といひ花をうの花とよみ向くと鬼の毛を似てれば此名あり歎眞
抄に流波花と書たるも白鬼花をまきのうとあふて鬼の毛を似てり但へ
を上畧くとも唱ふと十二支のあふりて考證をゆと尋ねる

丸 猿猴の生擔

童話云 龍王の次女病す 猴の膽の炙を嗜す 龜を嶋山へ遣り
猴を籠り貝綱へ誘ひ 丁が門卒ありたる 海蛇その謀を漏り 移り
猴又仍りて 膽の乾く嶋山の林ありたり 移りて 移りて 移りて
携へて 移りて 移りて 移りて 移りて 移りて 移りて 移りて 移りて 移りて
此一條は予近属ある物より引きて 類をうとあふり

祖庭事苑云 本行經云 我念往昔 海中有大蛇 甚
虬有婦懷妊 思猴心食 夫言此事 甚難 我居於海
猴在山 汝且容忍 我當求之 時虬即出于岸 見一
猴在大樹上 即以善言 尉問結為交友 我當將汝
度海 彼岸有大林 花果豐饒 汝可下 乘騎我背 上
猴心無定 故即依虬 言偈沒於水 虬即報言 我婦
懷妊 思食汝心 故將汝 乘猴 即誑虬 言汝何不豫

上ニ有テ水流ルハ廣ク狭ク如匹布割人謂之瀑布半徑有
山一穴如門豁然而過既入内甚平敞草木皆香有一
小屋二女子住其中年皆十五六容色甚美著青衣
一名宝珠一名見二八至竹然云早望汝未遂
為室家忽二女出行云復有得播者往慶之曳復於
絶巖上行琅琅然二人思歸俯去歸路二女追遂已
知乃謂曰自可去乃以一腕囊與根等語曰慎勿開
也於是乃歸後出行家人開視其囊囊如蓮花一重
去一重複至五蓋中有小青鳥飛去根還知此悵然
而已後根於田中耕家依常餉足見在田中不動就
視有殼如蟬蛻見手卷一
まうりく玉子箱の如外ららんまの古抄物ま玉匣とありまうりくと読む

乃集集卷十問答歌作者不詳級子ハ師不吹風故玉匣開而左
宿ネニシ吾其悔寸玉匣のあつるもの枕詞のうら浦嶋がまを詠む
まうりく玉子箱の如外ららんまの古抄物ま玉匣とありまうりくと読む
の縁各テハコまへ玉子箱とくも箱のあつるもの腕囊の袋又巾箱の為歌を名致す
起ホサハ箱者盛手拭之器也俗ニ打とんえたりや史に載るるも浦
嶋が子の事夢野の鹿のゆゑ凡智をりり量るるに實事ともあはれん
ゆゑへゆゆゆゆ新奇を好むが世の習俗に彼を傳はれし記をさくまを
餘るるもゆゆゆ古事記雄略天皇の辰の浦嶋がまのゆゑ日本紀
雄略紀云二十二年秋七月丹後國餘社郡管川
人水江浦嶋子乘舟而釣遂得大龜便化為女於是
浦嶋子戲以為婦相逐入海到蓬萊山歷觀仙衆諸
在列卷と記されし史の後まうりくのまうりく日本紀

忽作美女。玉顏之艷。南威按南威之美見守戰障破而失魂素質之閑。西施掩面而無色。眉如新月。出蛾眉。山雷似落星。流於天。漢水纖軀。雲襟散暫。留輕體。鶴立將。未翔。浦鳴子一本無浦。神女有。何因緣。而化未哉。何處為居。誰人為祖。神女云。妾是蓬萊山之女也。不之金庭。長生之玉殿。妾之居處。父母兄弟。在彼金闕。妾在昔世。結夫婦之義。而我成天仙。生蓬萊宮之中。子作地仙。遊於澄江之波上。今感宿昔之因。未隨俗。境之緣也。道向蓬萊宮。將遂曩時之志。願合眼。合眼鳴子。唯諾。隨神女。語須臾之間。向於蓬萊山。於是神女。携到蓬萊宮。而令鳴子立於門外。神女先告於父母。而後共入仙宮。神女衣香穠。似春風。

之送。百和香。飄聲錯錯。如秋調之韻。萬籟響。鳴子已為。漢父。唯為釣。躬而志氣一本作高尚。凌雲攝新。心存強。弱得仙。因徒其官。為幹金。精玉芙蓉。數丹。壻之內。珠珊。珊瑚。滿於玄圃之表。清冰之浪。公芙蓉。開露而發。榮玄泉之涯。頭蘭菊。含咲不凋。鳴子與神女共入玉房。薰風吹寶帳。而羅綺綺。一本作添香。翡翠簾寒。而翠嵐卷。一蓬芙蓉。惟開而素。日射。堤朝服金丹。石髓。暮飲玉酒。瓊漿。瓊漿一本。九先。芝草。駐老之方。百節。萬蒲。延齡之術。神女神女一本作妻非。漸見。鳴子之容。顏累年。枯槁。遂日骨立。定知。外雖成仙。官之遊。宴而內生。舊鄉之戀。慕宜。選故鄉。尋訪。舊里。鳴子答曰。久侍仙洞。之筵。常嘗靈。之味。何非樂哉。亦非幸哉。抑神女為天仙。余為地仙。

隨命進退豈得違旨哉。神一也。與送玉匣。畏以九絲之
錦繡緘以萬端之金玉。誠鳴子云。若欲見再逢之期
莫用玉匣之緘言訖。約成分手辭去。鳴子乘舟眠
自歸去忽以到故鄉澄江浦。
られ後紀の趣をうけく張文成が遊仙窟に擬して綴るる遊喜の比の文
人の述作致或は兼頭卿筆之と有り尋ねる浦嶋が子のるの扶桑畧記
も裁たる故事後又記さるる事と異なり亦此紀の童世物
ゆゑのりあり水鏡のゆゑに記され日本紀又因る紀されたるゆゑ
もあつて趣あるゆゑに抄りたる書に就くべし
萬葉集卷九。詠水江浦。鷺子一首并短歌。作者不詳
春霞之霞時余墨吉之岸余出居而釣船之得。体良
布見者右之。事曾所念。水江之浦嶋見之。堅魚釣。鯛

釣。及七日。家余毛不來。而海界乎。過而榜行余。海
若之。神之女。余避余。伊許藝。趨而相語。良比。言成之
賀婆。如吉結。常代余至。海若神之宮。乃內隔之。細有
殿余。携二人入居。而老目不為死。不為而永世余有
家留物乎。世間之愚人。之吾妹。見余。告而語久。須臾
者。家歸而及母。余事毛告良比。如明日。吾者末南登
言家。礼婆。妹之。答久。常世邊余。復及未。而如今。相
師。奈良婆。此。慈。閑勿勤。常。曾己。良久。余堅目。師事乎。
墨吉。余還未。而家見跡。宅毛見。金手。里見跡。里毛見
金手。在常所許。余念久。後家出。而三歲之間。余嚙毛
無家。滅目八跡。此管乎。閑而見手。齒。如本末。家者。拍
有登。玉篋。小披。余向雲之。自箱出。而常世邊。棚引去

者。互走。叶袖振。反側。足受。利四管。頓消情。失叔。若者。
皮毛。皺奴。黒有之。髪毛。白斑。奴。由奈。由奈。彼。氣。在。
倍。絶。而。後。遂。毒。死。邪。流。水。江。之。浦。嶋。子。之。家。地。見。

反秋

常世邊可住物乎。劔刀。已毛。心柄。於曾也。是君。

牛載集部賀

皇后宮大夫後成

りりらび浦嶋が子いあもとも親姑射の山ととたあるる

夫木集部雜

夢銭為相卿

まこよらあもあらぬ浦嶋やまもあまのえの海よりらるる

ある故事へのりとりと換あかりとあま益あまの言を極るその虚実

を願はん風雅の本意よもむいゆるれど大あまのころゆるもあまのい

り歌陶淵が桃源記陳翰が槐宮記張文成が遊仙窟記のよらるる

唐山の浦嶋が子あまを世俗の只厚を信とす附會の説を志とんち

くら武系烟襦樹郡神奈川の驪る西蓮寺と浦嶋を郎が塚と唱る

りの舞は縁起一冊あまを中葉車を好むりの烟引とる浦よこれを祭と

るよやや孫國朽本あま大平権現の枕源を彫つをあれまとり類

あまの

この餘鼠の隠里ハ述異記よあまをそれまの荒園とあり荒の塚入とりか

後草紙ハ寛永のころ既又行れま草紙の草紙の中中山三柳老人の醍醐

隨筆上巻七張よええちあまの類の物語ハ繪卷物よまありまを後

梓よのむらまらん被繪卷物と唱り月の繪合の餘波あまを源氏物語繪

合の巻のむらまらん物あまをまありまあれと鎌倉將軍の時

盛ありれ鎌倉右大臣のときあまありまありま陸奥前後の古戦の画

瀟を弄あまのあまの東鑑よええ亦同書よ建曆二年十一月八日於御所

繪合のクツアスえたりとの白麿え^{ヒモトクニシニ} 獻覽の繪の小野小河一期^{イナゴセイスイ} 蓋衰のりを

ツ^{トモミツレンラン} 朝光進覽の繪の^エ 本邦四大師の繪也^{スクラン} 教卷の中ら^{スクリゴセウ} の西部頗^{キリ} 又御種

愛^{アイ} 又及び、久老方を勝と定ら^{サダメ} りのち足利家の時^{アシカケ} 又及^ビ る貴^キ 貴^{カイ}

公子繪巻物を弄^{モテアソ} びあ^{モテアソ} りを^{モテアソ} する^{モテアソ} ところ^{モテアソ} 家^{モテアソ} 々^{モテアソ} 又繪合あり^{モテアソ} の

至太平記^{卷十} 又関白左大臣の家^{イダ} 々^{イダ} 畫合あり^{イダ} たる^{イダ} 洞流の左大臣の出^{イダ}

され^{イダ} たる^{イダ} 繪^{イダ} 又源氏の優婆塞の宮の御女^{イダ} 々^{イダ} 眞木柱^{イダ} 又居隠^{イダ} して^{イダ} 琵琶

琴を調^ハ あ^ハ り^ハ 又雲隱^ハ したる^ハ 月の儀^ハ 又最^ハ あ^ハ る^ハ ところ^ハ 出^ハ たり^ハ ば^ハ 癖^ハ あり^ハ とも^ハ

振^ハ くる^ハ なり^ハ の^ハ ところ^ハ 横^ハ を^ハ あ^ハ げ^ハ する^ハ の^ハ ところ^ハ 顔^ハ つ^ハ ら^ハ り^ハ ぬ^ハ 鴨^ハ 園^ハ と

み^ハ なる^ハ あり^ハ ぬ^ハ 氣^ハ 色^ハ の^ハ 限^ハ を^ハ 多^ハ 筆^ハ を^ハ 盡^ハ して^ハ ぞ^ハ り^ハ たり^ハ なる^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ

つ^ハ え^ハ たり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ 花^ハ 奥^ハ 又種^ハ 々の^ハ 巧^ハ を^ハ ば^ハ け^ハ され^ハ ぬ^ハ の^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 新^ハ なる^ハ ところ^ハ

三^ハ 徳^ハ 受^ハ 致^ハ する^ハ 繪^ハ 巻^ハ 物^ハ と^ハ ち^ハ 経^ハ たり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 慶^ハ 長^ハ の^ハ 後^ハ 々^ハ せ^ハ ら^ハ 世^ハ 々^ハ

行^ハ 々^ハ 書^ハ 興^ハ の^ハ ところ^ハ の^ハ 画^ハ と^ハ り^ハ ぬ^ハ の^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 毎^ハ 年^ハ 又^ハ 出^ハ たり^ハ なる^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 剛^ハ 人^ハ 又^ハ 細^ハ 工^ハ 出^ハ 未^ハ だ

り^ハ れ^ハ ば^ハ 書^ハ 肆^ハ 本^ハ 々の^ハ 便^ハ 利^ハ した^ハ る^ハ こと^ハ 彼^ハ 繪^ハ 巻^ハ 物^ハ の^ハ 中^ハ 々^ハ 俗^ハ なる^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ

印^ハ 々^ハ たり^ハ ぬ^ハ 繪^ハ 巻^ハ 物^ハ の^ハ 廢^ハ した^ハ る^ハ こと^ハ 今^ハ 々^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 數^ハ 金^ハ 又^ハ 費^ハ

し^ハ ころ^ハ れ^ハ を^ハ 購^ハ び^ハ 或^ハ は^ハ 寫^ハ し^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 予^ハ 々^ハ 管^ハ 見^ハ を^ハ かり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ

々^ハ 後^ハ 々^ハ 事^ハ 合^ハ 戰^ハ 記^ハ 山^ハ 光^ハ 大^ハ 師^ハ 行^ハ 狀^ハ 記^ハ 駿^ハ 牛^ハ 繪^ハ 詞^ハ 四^ハ 牛^ハ 十^ハ 圖^ハ 三^ハ 十^ハ 六^ハ 番^ハ 歌^ハ 合^ハ

七^ハ 十^ハ 一^ハ 番^ハ 歌^ハ 合^ハ 十^ハ 二^ハ 額^ハ 歌^ハ 合^ハ 調^ハ 度^ハ 歌^ハ 合^ハ 虫^ハ 合^ハ 鳥^ハ 合^ハ 福^ハ 富^ハ 草^ハ 紙^ハ 雀^ハ 松^ハ 原^ハ 常^ハ 盤^ハ

廻^ハ 物^ハ 誌^ハ 花^ハ 鳥^ハ 風^ハ 月^ハ 太^ハ 秦^ハ 草^ハ 紙^ハ 天^ハ 物^ハ 内^ハ 裡^ハ 北^ハ 野^ハ 大^ハ 茶^ハ 湯^ハ 記^ハ 文^ハ 正^ハ 草^ハ 紙^ハ 芥^ハ か

ぼ^ハ ね^ハ 小^ハ 所^ハ 草^ハ 紙^ハ 嶋^ハ 々^ハ 々^ハ 七^ハ 草^ハ 草^ハ 紙^ハ 若^ハ 草^ハ 草^ハ 紙^ハ 猫^ハ の^ハ 草^ハ 紙^ハ 浦^ハ 嶋^ハ を^ハ 邸^ハ 物^ハ 草^ハ 太^ハ 郎^ハ 子^ハ

敷^ハ 蓋^ハ 二^ハ 人^ハ 比^ハ 丘^ハ 尼^ハ 七^ハ 人^ハ 比^ハ 丘^ハ 尼^ハ 四^ハ 人^ハ 比^ハ 丘^ハ 尼^ハ 女^ハ 郎^ハ 花^ハ 本^ハ 々^ハ 餘^ハ け^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ

と^ハ び^ハ 獲^ハ 蟹^ハ 合^ハ 戦^ハ 桃^ハ 太^ハ 郎^ハ 物^ハ 誌^ハ 花^ハ 咲^ハ 菖^ハ 鬼^ハ の^ハ 仇^ハ 讐^ハ 鼠^ハ の^ハ 嫁^ハ 入^ハ る^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ

な^ハ る^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ 繪^ハ 巻^ハ 物^ハ 々^ハ 々^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ

の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ

撰^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ 宇^ハ 治^ハ 拾^ハ 遺^ハ 物^ハ 誌^ハ 又^ハ 由^ハ 執^ハ の^ハ 嫁^ハ 入^ハ する^ハ ところ^ハ の^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ ところ^ハ あり^ハ ぬ^ハ

